

カラヴァッジョ展

北海道立近代美術館 2019. 08. 10～10. 14 名古屋市美術館 2019. 10. 26～12. 15
あべのハルカス美術館（大阪市） 2019. 12. 26～2020. 02. 16

「ミケランジェロ・メリージ・ダ・カラヴァッジョ」（1571～1610）は、17世紀のルネサンス期後にローマ・ナポリ・シチリア・マルタなどで活躍し、あたかも映像のように人間の姿を写實的に描く手法と、光と陰の明暗を明確に分ける表現は、バロック絵画の形成に多大の影響を与えたイタリア出身画家である。

画伯は、西洋美術史における最重要画家のひとりで、現存作品はわずか「60点ほど」とされ、その多くは「祭壇画」などで移動が不可能ということもあって、作品の国外への貸し出しはこれまで非常に厳しいとされていた。

本展最大の見どころは、本邦初公開の画伯の代表作「3点」の来日である。



左：《病めるバッカス》（1594年）、札幌会場でのみの展示

重病に罹患して回復の途上にあつた時期に、印象的なギリシャ神話の酒の神「バッカス」を描いたもので、モデルは画伯自身ではないかと言われている。

中：《ホロフェルネスの首を斬るユディト》（1598～99年）

旧約聖書外典『ユディト記』の一場面を描いた油彩画作品で、暗闇に「ホロフェルネス」の上半身と「ユディオ」だけが浮かび上がる画伯の巧みな光の使い方が見事な作品である。この『ユディト記』は、美しい未亡人「ユディト」が、敵である「ホロフェルネス」の寝込みを襲って首を落として国を救ったというもので、このショッキングな画面構成は、バロックおよびバロック以降の芸術表現に大きな影響を与えたとされている。

右：《ゴリアテの首を持つダヴィデ》（1610年）、

元来、気性の荒さで知られてこの頃は殺人を犯して罪を逃れて流浪していた。斬られた「ゴリアテ」の首が画伯の自画像であるとされている。